

「東日本・家族応援プロジェクト in 福島 2019」を開催しました

人間科学研究科教授 村本邦子

2019年11月20日（水）～12月7日（土）、福島市子どもの夢を育む施設こむこむにて、9年目を迎える「東日本・家族応援プロジェクト in 福島 2019」を開催しました。特定非営利法人ビーンズふくしまの共催、福島市子どもの夢を育む施設こむこむの協力、福島県、福島市、福島市教育委員会、福島大学うつくしまふくしま未来支援センターの後援を頂き、漫画展、漫画トーク、クリスマスカレンダーを作ろう、東京おもちゃ美術館寄贈のおもちゃを使った遊びコーナー、おもちゃコンサルタントによる遊び講習会のプログラムでした。

毎年人気のクリスマスカレンダーには、親子合わせると百名を超える参加者がありました。それでもたくさんの方々をお断りしたのです。隅々まで眼が行き届くかどうか心配しましたが、今年は総勢18名とチームメンバーも多く、ビーンズふくしまのご協力もあり、みなさまに喜んで頂き、無事終了しました。

子どもたちのアンケートには、「まいにち、お菓子を食べられてしあわせです。（8歳男）」「発表の時に説明してくれて感謝している（11歳男）」「いろんなお菓子があって、なんにちにも何をたべるのが楽しみです。（8歳女）」「毎日が楽しくなりそうです。来年もこういうきかくがあれば、ぜひ参加したいです。（10歳女）」「工夫したところや気に入ったところがたくさんあります。これからの12月が楽しみです。（9歳女）」などかわいらしい声がたくさん書かれていました。中には、「ツリーを作って3年目です。今年で終わりですけど、この3年間ツリーをつくることは楽しかったです。（9歳男）」など、2年目、3年目と毎年楽しみに参加してくれている親子も目立ちました。年齢制限を設けているためにこれで終わりとなっていますが、そんな子どもたちと、またいつの日かどこかで出会えるといいなと思います。

保護者のアンケートには、「久しぶりに子どもとゆっくり工作することが出来ました。色々な材料を用意していただき、とても楽しく過ごすことが出来ました！ありがとうございました！！（40代女）」「息子と一緒に作るの、とても楽しかったです。かわいいお菓子や飾りの素材など、一人っ子の息子に一から沢山用意してあげるのも大変で、家で作ろうと思ってもハードルが高いのでこの様な機会があって良かったです。（30代女）」「なかなかモノづくりに参加したことや機会がなく、子どもも積極的にやりたいと言った事がなかったので、今回初めて参加して、楽しいと思えたようで、親としてもうれしかった。また、参加してみたいと思いました。」など、親子で楽しいひと時をすごした様子や、「息子は制作が苦手で、上手にやらなくては・・・と焦り、他人と比べてしまうことが多く、実際ツリーの形を作る時点で表情が曇っていました。でも立ち直り、手直しをしなくても自分の書いたツリーの形で大成功できたこと、自信につながっていると思います。失敗と思っても大丈夫と前向きな子になって欲しいので、今日とてもいい経験でした。（40代女）」と子どもの成長を見

守る親の眼差しを知ることができ、暖かい気持ちになりました。



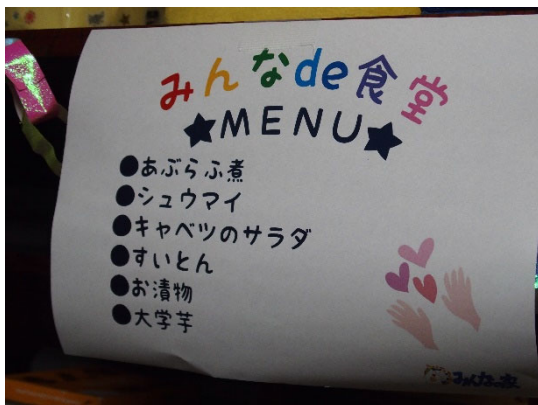
遊びコーナーにも、「楽しい企画でした。(40 代男)」 「家でカプラを作ってみたいと話していたところだったので、こちらで実際体験できてうれしかったです。他にも様々なおもちゃのことが知れて貴重な機会をありがとうございました。(40 代女)」などの声が寄せられました。おもちゃコンサルタント小磯厚子さんによる講習会は、メンバーである大学院生たちの勉強になったようで、とくに臨床心理士を目指し「プレイセラピー」を学ぶ院生たちが日ごろの実践を反省とともに振り返ったことが印象的でした。



さらに、漫画展には、「3 世代よりも前のこと、ルーツ知らないことが多いですね。個人的には力が入っていること→抜くの話にドキッとしました。上手に抜けるように。ありがとうございました。(40 代)」 「とても良いです。さいこう OK (50 代)」 「とても優しい絵で、思わず立ち止まって読んで見ました。とてもあたたかい話でした。(40 代)」 の声が、漫画トークには、「長崎出身で心理職をしています。震災支援でこちらに来ました。＜木陰の物語＞は学生だった当時長崎で知りました。今回、団士郎先生のお話を直接聞く機会を持ててとても嬉しく思います。このプロジェクトが続くよう応援しています。本日はありがとうございました。(30 代女)」 「このころのケアについて学んでいる立場から聞いたので、新鮮だった。教育者の視点とこのころのケア的な視点のバランスがうまく取れたらよいと思った。(20 代女)」 「先生の言う通りです。社会が変わらないと社会を変えるには、一人ひとりの力だと思います。誰かが変えてくれるのではないということ、自分がどう行動するかですよね。(50 代女)」 「笑ったり、涙したり、心和む時間になりました。ありがとうございました。(20 代女)」 などの声がありました。9 年目にして各プログラムが定着しつつあることを嬉しく思い、私たちの応援の気持ちが何がしか届いていることを願います。

今年のフィールドワークも、例年に増して充実していました。詳細は、下記院生報告に委ねますが、チーム全体では、NPO 法人ビーンズふくしま「みんなの家」を訪れ、フリージャーナリスト藍原寛子さんのお話を聞いた後、最終日には、昨年に引き続き、NPO 法人福島地球市民発信所（福伝）の竹内俊之さん、藤岡恵美子さんの案内で飯舘村へ行き、元酪農家の長谷川健一さんのお話をお聴きする機会を得ました。

みんなの家





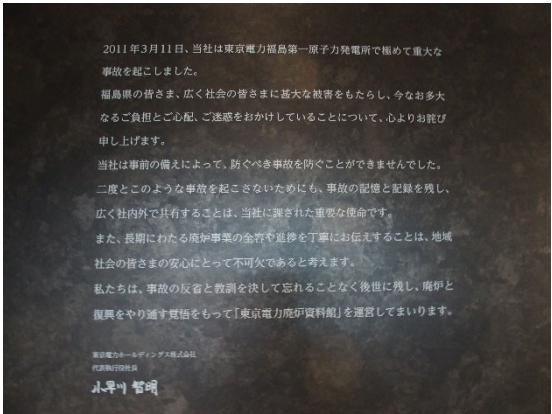
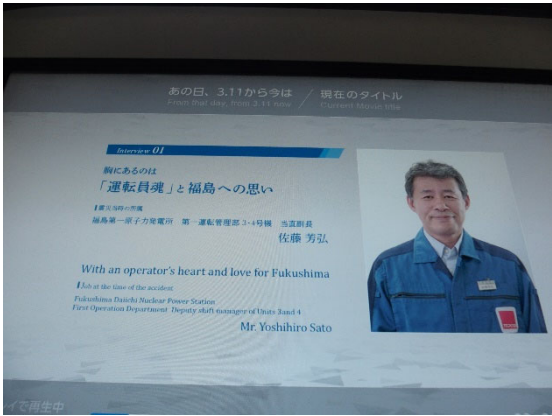
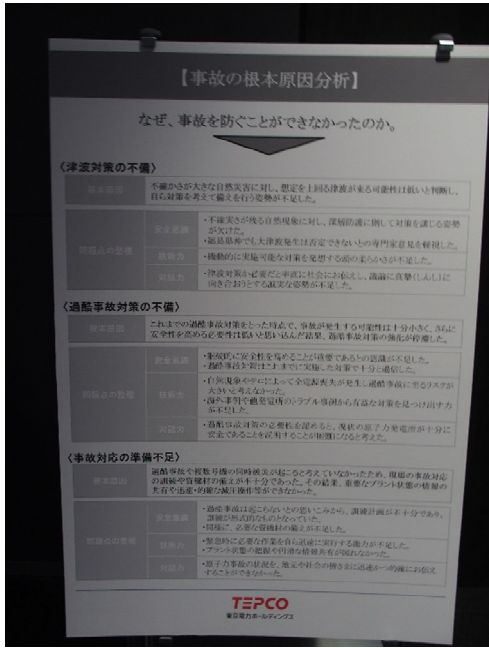
飯館村スタディツアー







また、チームに分かれて、東京電力廃炉資料館、環境省の特定廃棄物埋立資料館リブルンふくしま、中間貯蔵工事情報センター、双葉思い出の品展示場、コミュタンふくしまなど、関連施設を見学して巡った他、今年も、福島大学で後藤忍先生の講義を受けたり、極久里コーヒーを訪ね、おいしい珈琲とお菓子を頂きながらお話を聞いたりもしました。





帰ってから、沿岸部の資料館からもらってきた冊子を読み、また、長谷川健一さん・花子さんの著書『までいな村、飯館』（七つ森書館）を読み、さまざまな感情に圧倒されました。原発事故のことを早く過去のことにして消し去ってしまいたいという空気は、遠く関西にいても日々感じるものですが、毎年、自分たちが福島に身を置き、みなさまの声を聴かせて頂きながら、そこにあるたくさんの声なき声と辿り切れないほどの複雑な力動を体感します。狂気の時代と、そこを生き抜く人々の優しさと逞しさ。行ってみなければわからないことがたくさんあります。このプロジェクトも来年の十年でひと区切りですが、とても区切りなどつけられそうもない現状に、私たちに何ができるのだろうと自問する日々です。

2019年の福島

人間科学研究科客員教授 団士郎

例年より大勢の院生達が参加の福島プロジェクト。

私にとってはパネル展示も講演会もスムーズに、つつがなく終わられた。マンガパネルが例年より長期間展示できて、いろんな人の目に触れることがあったようで、それは有り難か

った。これまでは非常に日時の限られた展示だったので、あの場に委ねて観ていただく実感が持ちにくい会場だったのだ。

しかし一方、準備段階では、会場外で想定にない行き違いや、トラブルがあったようで、プログラムの中味ではないが、その対応にあたったスタッフ平田さんの労をねぎらっておきたい。

今年のマンガトークの素材は一話を配布小冊子から、もう一話は展示作品から採った。選択の工夫のつもりだったが、聴衆には余り違いはなかったのかもしれない。次年度、ラストイヤーはこだわることなく10年の区切りとして選択しよう。

ここ数年、こむこむ1階のオープンスペースで開催している。それほど騒がしい会場ではないが、天井が高いことや、音声システムの貧弱なことで若干のストレスが消えない。しかしそれにも関わらず、今回は講演終了後、4人の方が待っていて話しかけて下さった。存じ上げなかった方や、マンガ展も講演も初めてという方々だった。イベントの会場コンディションは、これくらいが実はいいのかもしれないと思った。

私的にはチェルノブイリ訪問後初の福島だった。これまでの訪問と比較すると、主観的だが福島が相対化されて位置付いている実感がある。いろんな点をチェルノブイリと比較できることで、福島が絶対的に了解しにくいものではなく、比較の中で言えることがたくさんある場所になった。そして、あらためて、問題が問題なのではない。問題解決が問題なのだというシステム論の考え方を思った。





東日本家族応援プロジェクト 2019 in 福島

臨床心理学領域 M1 竹中由佳理

今回、東日本家族応援プロジェクト in 福島に参加させていただきました。

まず、メインのプログラムで、福島市駅近くのこむこむ館で、クリスマスカレンダー（アドベントカレンダー）づくりをする一日前（12月6日）には、特定非営利活動法人ビーンズふくしまの運営する福島市笹谷所在の「みんなの家@ふくしま」を訪問させていただきました。ビーンズふくしまは、震災前から活動されていましたが、震災後からは、徐々にニーズに応じて、フリースクール、ユースプレイス、子育て支援、ひきこもり支援など、支援事業を拡大され、福島において不可欠の存在になっている存在感が印象的でした。みんなの家@ふくしまでは、ニーズに合わせた企画、例えば、妊婦を対象にした「プレママ day」、乳児を持つ母親を対象にした「ベビママ day」を設けるなど工夫がなされており、行政主導の子育て支援とは違う、細やかさが感じられました。3.11の震災直後には、福島大学の学生と協力して、子どもたちへの支援活動をされたこともうかがいました。そこから培われたスキームは、2019年10月に上陸した台風19号の被災による子どもたちのケアにおいても役立ったということでした。

ビーンズふくしまが発行されている「みんなのひとしずく」の冊子には、避難して、福島

に戻って来られた方のアンケート結果が載せられています。福島に戻ってきて感じることに、「いろいろ思うことはあるけど、うまく表現できない……。ごめんなさい。」、金銭的に限界になったという理由で福島に帰ってきた人は「福島では放射能のことを気にする人は少なく……。あまり本音では話せません。今でも、福島から離れたいです。温度差があり住みづらいです。」などと述べられていました。他の人も「原発のことを話せる人が少ない」ということも記載されていました。今、マスメディアなどでは、復興の側面ばかりが強調されていますが、原発の事故が起こったことがきっかけで、家族との関係、コミュニティの関係、放射線のこと、複雑な心境を抱えていらっしゃる方がいるという現実を真摯に受け止めるなければならないと思います。

翌日（12月7日）のクリスマスカレンダー（アドベントカレンダー）作りをしました。始まる前に、子どもたちが、カレンダーの見本を前に見に来て、どんなお菓子があるのか、どのような飾りをつけようかと言いながら、目をキラキラさせていました。その様子を見ている私も楽しみになり、うれしい気持ちになりました。私の担当させていただいたテーブルでは、偶然、お母さん同士が顔見知りで、久しぶりに再会ができたようでした。それぞれの子どもが成長している姿をみられて、「大きくなりましたね。」と実感されていたのが印象的で、このような機会があつてよかったとおっしゃってくださっていました。子どもたちも、お菓子を貼る場所を「何日に何を食べようかな〜？」と楽しそうに考えたり、リボンや綿、シールなど様々な色とりどりの飾りを選んで、バランスを見ながら貼っている様子があつたり、本当に楽しそうでした。子どもたちは、自分で作ったカレンダーに満足そうで、笑顔で帰られました。

3日目（12月8日）には、飯舘村へ行きました。宿泊体験館きこりへ向かう道中で、フレコンバックを写真以外で初めて見ました。黒い塊がいくつも積み上げられており、何かの映画に出てくる基地のような異様な雰囲気を感じました。福島市内に移転前の極久里珈琲の建物にも寄っていただきました。そこに立ち、極久里珈琲のお店の前にブルーベリー畑が広がっているのを想像したら、以前は、どんなに素敵なカフェだったんだろうかと思いました。しかし、今は、お店のところから見えるのは、黒いフレコンバックの山で、のどかな雰囲気とは真逆の雰囲気が漂っているのが悲しくなりました。

きこりへ到着して、まず、長谷川健一さんを主人公にした『「牛が消えた村」で種をまく「までい」な村の仲間とともに』の絵本をみんなで朗読しました。この作品は、写真がたくさん載せられているため、音読される言葉と写真がダイレクトに私の心に響きました。胸が熱くなりました。美しい自然も牛も家族同然の生活が、一気に切り裂かれたことを思うと、やりきれない思いが一気に込み上げてきました。理屈ではなく、心に訴えかけるこの絵本は福島の抱えている複雑な状況を理解してもらうために是非多くの方に読んでいただきたいと思いました。

その後、飯舘村を案内していただきました。広大な農地をみました。長谷川さんがそばを植えるなどして、管理されているということでした。村役場前では、和ませ地蔵の頭を撫で

ると村民歌が流れてきました。子どもたちの合唱で、美しい飯舘村の自然やそれを誇らしく思い、もっと発展していこうという歌詞を聴くと、より悲しみが込み上げてきました。

再びきこりに戻り、お弁当をいただきながら、震災前の平成20年に制作された飯舘村50年の歩みのDVDを観ました。村民が一步一步、着実にみんなで協力して発展していかった様子がよくわかりました。新春ほら吹き大会から実現した平成元年から5年間、村のお嫁さんたちをヨーロッパ海外研修に派遣した「若妻の翼」事業のことも紹介されており、本当に素敵な村だと心から思いました。その他にも、村の運動会や伝統芸能を披露しているような様々な行事が開催されており、どれもにぎやかで楽しそうな様子が伝わってきました。都会とは違って、村民の確かなコミュニティができていたものが、震災で一気に壊されたかと思うと、本当にやりきれない思いでいっぱいになりました。

福島はもう復興したとして、3.11の震災・原発事故が招いたことから目を背けてはならないと思います。私のできることは、本当にわずかなことですが、福島で起きたこと、起きている事実を真摯に受け止め、関心を寄せ続けることだと思いました。そして、私がこのプロジェクトに参加して、直接体験させていただいたこと、感じたことを「証人」として、周囲の人に伝えていかなければならないと思っています。

東日本家族応援プロジェクト in 福島

臨床心理学領域 M1 長野 楓

コミュタン福島

コミュタン福島は、交流棟に「ふくしま 3.11 から」「ふくしまの環境のいま」「放射線ラボ」「環境創造ラボ」「環境創造シアター」の5つのエリアがあり、福島第一原子力発電所の事故・放射線・再生可能エネルギーについて学ぶことができた。

福島の震災については、原発事故後の福島第一原子力発電所の再現縮小模型の展示があり、スタッフの方から事故の説明がされた。私は事故の状況をテレビで部分的にしか見たことがなかったため、縮小模型でも大事故であったことが分かる荒れ果て方が再現された模型を目の当たりにして胸が苦しくなった。

360度どこからでも映像が見られる環境創造シアターは、福島県出身の芸能人のナレーションが印象的な映画を観た。その内容は、恐竜が登場し人類の歴史が分かる番組と放射線の話、福島県の映像であった。これらを見て、大迫力の映像に圧倒されながらも福島県の魅力を存分に感じる事ができた。まるで自分が実際にそこにいるような不思議な感覚がとても印象に残っている。

放射線については、始めに霧箱というものを見た。どのようにして放射線の飛跡を視覚的に観察できるようにしたのかとても不思議だった。隣では、日本の代表的な都市の放射線量を見ることができた。東日本大震災当時2011年3月11日から現在までの放射線量を見る

ことができるので、数値の変化を簡単に比較することができた。私達は、福島県のあらゆる地域を画面で選択して放射線量を比較した。その数値は年々下がっており、県内の除染が進んでいることが分かった。しかし、未だに高い数値が表示されている地域もあり、胸が締め付けられるような思いがした。他には、放射線や放射能の強さを測定する機器の紹介や実物の展示があった。これらを見た時私は、原発事故直後、被ばくに敏感になっていたどれだけの福島県民がこれらの機器を手に入れたと思ったのだろう、どれだけの子を持つ親がこれらの機器で放射線を測定しその数値におびえていたのだろうと考えた。しかし、放射線の正しい知識が県民に広く伝わっていたかどうかは疑問である。震災当時実際に正しい知識を教えた人や機関があったのか。そのような疑問が解消されないまま私は施設を回った。その次に見た、民家において放射性物質が集まりやすい場所を視覚的に示す模型では、放射性物質が家を囲むようにして存在しているということが分かった。福島県のように土地が広く大きな一軒家が多い住宅街では庭や玄関が広いため、各家庭に大量の放射性物質があるということになる。それはとても恐ろしいことであると感じた。庭の手入れや子どもの遊び場の確保が難しかったことがよく分かった。

この施設は、原子力や放射線のことを丁寧に分かりやすい言葉で説明していたので退屈せずに最後まで関心を持って見学することができた。しかし、原子力発電所の事故の教訓や放射線の正しい知識を知るためには、このような「楽しさ」が必要であろうかと疑問に感じた。被ばくによる人体被害や環境被害についてもっと学びたかったと思った。施設内には、小学生からの「コミュタン楽しかった」や「コミュタン最高」などと書かれた紙が沢山貼られており、放射線や事故のことについて「学ぶ施設」よりも、「楽しい施設・面白い施設」という印象を与えていることがよく分かった。果たしてこのような方向性は間違っていないのか、そして運営側は結局放射線について肯定的にしか伝えようとししないのかそのような疑問が次々にわき起こった。コミュタンを見学して、これからも原子力発電と放射線事故について考えたいと強く感じたので、福島県に行く際はぜひまた見学したい。

福島大学 後藤忍教授の特別講義

講義の内容は、震災・事故に関する展示施設の動向と文部科学省作成の放射線副読本の内容分析の二つであった。

展示施設については、福島県内にいくつもそのような施設があることを知らなかったのが単純にその数に驚いた。設置主体は異なるが、その分様々な団体や様々な立場から福島県の震災と事故の現状を発信しようという動きがあることがよく分かった。私は今回、コミュタン福島しか行けていないので、他の施設との伝え方の違いやそれぞれの施設の掲げる目的を実際に行って比べてみたいと思った。

放射線副読本の内容分析については、後藤先生作成の副読本と平成30年度の文部科学省作成の副読本を事前に読み比べていたので理解しやすかった。しかし、何を伝えるのか、誰に伝えるのかという違いから、副読本の内容が変わっていることに違和感があった。私達

は何を信じれば良いのか。国が国民に伝える内容が、今後専門家と協議しながら統一されていくべきなのではないかなと思った。

水引ピアス作り体験

福島駅近くの水引体験ができる工房「夢」へお邪魔した。ここでは水引でピアスを作った。始めにどんなデザインのピアスが良いか見本を見て選び、好きな色の水引を選んだ。そこから基礎を教わった。基礎は「アワジ結び」という結び方で、できるようになるまでは少し時間がかかった。

そして、作りながら先生の震災当時の話を聴くことができた。特に避難の体験について「気を遣いながら一か月くらい避難していたけどね…。やっぱりね、『福島がいいね』って。」と語られたことが印象に残った。この時、地元に対する愛を感じた。そして、避難して安全な暮らしができて、そこにはどこか心が満たされない状態が存在するということを学んだ。

「いつもの暮らしが一番」というのは自分でも分かっているつもりではあったが、こうして先生の避難生活を聴いてからは、それは経験しないと本当の意味では理解できないということを学んだ。

特定非営利活動法人「ビーンズふくしま」子育て支援センター みんなの家@ふくしま

電車に乗って「みんなの家@ふくしま」を訪ねた。ここでは、スタッフの中鉢さんからのお話がありその後施設の方々と交流会をした。

中鉢さんからは、ビーンズふくしまの説明と震災についてのお話があった。私は援助職に就く者として被支援者のニーズを知ることが必要であると感じた。またニーズを知ることだけではなく、どのような援助者がどのような組織となって援助活動をするのかの仕組みも理解すべきであると思った。

震災に関しては、話を聴きながら配布資料を見た。中鉢さんの話から、震災や事故によって福島県に住む沢山の家族の基盤が弱まってしまったことを知った。被災すれば避難するのは当然だと思っていたが、簡単に避難できない状況や心情があるということと、避難先で出くわす困難があることを知っていたたまれない気持ちがした。避難先から帰還する県民がいることに関して、帰還するために近場に避難するという思いは地元に対する思いの強さや地元に対する愛からくるものなのかなと感じた。福島県には「人と人との繋がり」と「福島と人との繋がり」があることを学んだ。

施設の方と子ども達との交流では、一緒にシュウマイを作ったり、配膳を手伝ってから晩御飯を食べた。私のテーブルは全員立命館からの参加者だったため、現地の話を聴くことはできなかったが、プロジェクトの話をしながら施設の方の手作り料理を美味しくいただいた。片付けも皆で協力して終わらせた。

このような温かみのある施設で貴重な話を沢山聴くことができたのは自分にとって本当に良い経験になったと感じている。自分が置かれたことのない状況にある人の困難を知り

支援することは難しいかもしれないが、この施設を訪問して、支援者としてできることは現状を知って寄り添っていくことから始まるのだと考えた。

クリスマスカレンダー作り

「こむこむ」で、午前中にクリスマスカレンダーづくりのイベントを行った。大勢の参加者をグループ分けし、それぞれのグループに院生が付いて交流しながら行った。このイベントは親子で非常に人気のイベントであり、参加家族の沢山の笑顔が見られてこちらも幸せな気持ちになった。私は担当グループの方の被災の話を聴くことはできなかったが、現地の方達と交流できたことが何より嬉しかった。作品には子ども一人一人の個性が表現されているように感じられ、さらに真剣にお菓子やデコレーション材料の配置を考える子どもたちの表情が見られたこともこのイベントの醍醐味であると感じた。担当した子どもに笑顔で「ありがとうございました。」と言われたことと、作品を嬉しそうに持って帰る姿を見られて本当に良かった。

おもちゃコンサルタント小磯厚子さん による おもちゃ講習会

小磯さんが見せてくださったおもちゃは、過去に一つも見たことがなく、童心に返ったつもりで楽しく説明を聴いた。しかし実際はおもちゃの遊び方の説明よりも、小磯さんが指摘した「これはどうやって遊ぶのだろう」と考えてしまうところと「遊んでいたおもちゃを片付けないと次のおもちゃで遊んではいけない」と考えて指示するところが大人の悪いところであるということが印象深く残っている。

講習会では、「子どもは独自の遊び方や使い方を自由に行使して一つのおもちゃでも沢山の遊びを生み出す」、「時には違うおもちゃ同士を組み合わせさせて遊ぶことができる」、「複数人で遊べるものだけでなく一人で遊ぶものでも遊び方次第で人との繋がりができていく」、「おもちゃの使い方に『間違い』はない」ということを学んだ。また、遊びはその子どもにとっての力を発揮する機会であり成長であるということも学んだ。当たり前のように感じていた大人の指示は子どもにとっての大切な瞬間を奪っていたことを知った。

団士郎教授による 漫画トーク

団先生は、「物語は良いものも悪いものもその人に支えになる」とおっしゃっていた。今回のテーマは「心を支える,回復」と「心を鍛える,成長」であった。

心を支えるというテーマにおいては、漫画中の「孤独に苦しまなければならないのがつらいのだ」という言葉が印象に残った。このことから、クライアントが抱える問題の理解だけではまだ援助者として不十分であり、問題を抱える辛さに目を向けることが重要なのだと思った。そして職業上のことだけではなく、私生活でも自分に眼差しを向けて言葉をかけてくれる存在は必要であるし、自分自身が誰かに眼差しを向けて言葉をかける存在になるべきであると思った。

心を鍛えるというテーマにおいて、先生は「この子、〇〇なのです」という取扱説明書が多い子どもは適応できる世界が少なくなってしまう、それはその子にとってとても大変なことだとおっしゃっていた。私はこの一言で、先天的な困難は別として育て方や環境で人間はどの方向にも育つ可能性を持つということを考えた。そして、私が大学院に入って本プロジェクトに関心を持って勉強しているのも、親の育て方が影響しているのだと強く感じた。なぜなら、私の両親は「好きなことをしなさい」「気になったことは実際にやってみなさい」といつも私の背中を押してくれる人だからである。そんな両親に感謝したいと思った。

団先生の漫画は、いつも短い文章で心の的を射る魅力があると感じている。さらに「確かにそういう時あるな。」と思う何気ない瞬間に立ち戻らせてくれたり「自分だけじゃないのだ」と思える素朴な安心感を与えてくれるとも感じる。今回はそんな団先生の漫画の魅力を、家族に焦点を当てて理解することができたと思っている。

フリージャーナリスト藍原寛子さん によるお話

藍原さんの取材体験のお話を聞いた。

「福島市内の人もあの頃の経験を話そうとしない。忘れてしまったり、思い出したくない」と思っている人が多い」というお話に、胸が痛くなった。私は、震災や事故は、伝えられ続けることで受容され予防を考えられるべきであると思っている。しかし、東京電力との不協和によって、福島の人々は震災や事故で被害にあったことを「伝え広めるべき」ではなく「隠すべき」事実として抑圧しているのではないか、また訴えても何にも変わらないと諦めているのかもしれないと考えた。

震災から変化したことと変化していないことについて、今もむき出し状態のフレコンバックや汚染されたものを震災と事故の証として忘れ去られないように残しておくという福島の人々の選択にもどかしさを感じた。人は目に見えないものをいつまでも着実に意識下に置いておくことができない。したがって埋めることは意識下から震災と事故の証を消すことになってしまう。しかし目に見えるようにすることで精神的な負担など様々な苦難を背負い続けることになる。こんな残酷な葛藤を今まで自分は感じたことがあるだろうか。本当にもどかしい思いがした。

このような葛藤と共に生きていく福島の人々の実態を、藍原さんの取材体験から間接的に学ぶことができた。耳を塞ぎたくなるような心苦しさを覚えつつも、無知な自分を少し脱することができた。

飯舘村フィールドワーク

早朝に福島市を出発し、半日間飯舘村でフィールドワークをした。始めに宿泊施設「きこり」で長谷川健一さんの絵本を読み、長谷川さんと共に道の駅や村内の視察へ出かけた。きこりへ戻ってからは飯舘村の歴史のビデオを見ながら昼食をとり、午後は長谷川さんからの震災のお話と質問形式でもお話をいただいた。

写真絵本『牛が消えた村』で種をまく」は、始めのページで長谷川さんが牛乳を捨てる写真から衝撃的で涙が出た。酪農とは縁遠い生活をしている私は、牛を屠畜場に送っていたことなど全く知らなかった。長谷川さんが抵抗する牛を無理やり引っ張る様子が見ていられないほど悲しい光景であった。牛に罪はない。人間の生活に必要ななくなると殺すという人間の都合に合わせた人生があって良いのか。そんな疑問を感じながら、自分の体と人生を支えてくれていた存在を思い知らされた。なんとも言葉にしづらい息苦しさを感じた。しかしこの絵本の後半は、長谷川さんが村を守ろうと決心した強い「土地への愛」が悲しみと悔しさに拮抗するように登場し、私はそんな村を応援したいと思った。大切な家族と離れ離れになっても、村が朽ちないよう田畑を耕す姿は本当に格好いいと思う。

村内の視察では、あちらこちらに置かれたフレコンバック、帰還しないことが決まった元村民の壊し途中の家、畑として使用しなくなった分の広さを活かした大量の太陽光発電、何もない更地を眺めながら移動した。村が過去の姿に戻ることは二度とないという事実を私自身が受け止めるのも難しかったし、この村が震災前どんなに美しかったのだろうと悔しい気持ちでいっぱいだった。

きこりに戻ってからの長谷川さんからのお話では「放射線は故郷や家族といった全てをバラバラにした。もうもとには戻せない。放射線事故が他の災害と圧倒的に異なるのは、修復できないところだ。」という言葉が一番印象に残った。事前学習からこのフィールドワークまでに学んだことがこの言葉に集約されたように感じた。震災当時村内で起こったことを聴いて、同じ地域に住むもの同士が仲間割れするような事態になるほど原発事故は深刻な被害を与えたのだということが分かった。

「それでも私は、農地でソバを作ってここでのびのびして生きたい。それが一番好きな生き方だ。」と語られた。この「好きな生き方」という表現はとても素敵だと思った。それは、「多少危険な地域でもいい」という諦めではなく「好きな場所で好きなことをして生きることが一番である。」という幸福感なのかもしれないと感じた。

[お話を聴いた全体的な感想]

悲しくてもどかしい気持ちになったけれども、現地の方のお話を聴くことでより現実的な出来事として震災と事故のことが理解できて本当に良かった。何も知らなかったことに罪悪感を覚えたが、この罪悪感を前向きなものにしたいと感じた。今の自分には、除染活動に加わることや県と国に実態を訴え続けることなどはできないが、長谷川さんからは「大切なのは細く長く関心を持ち続けること」だと教わった。したがって知ること自体にはそれほどの価値があるということが分かった。そしてこれらの学んだことを、私自身がどう理解し考え、それを知らない人にどう伝えていくか、また、それを知っている人達とどう共有するかということを考え実践することが必要であると思った。

東日本家族応援プロジェクト 福島レポート

臨床心理学領域 M1 久保田 まり

1 日目

・ コミュタン福島

コミュタン福島は放射線や環境問題について映像やゲームを使って楽しく学ぶことができる施設で、2016 年 7 月にオープンした。愛地球博から移設された 360 度のスクリーンを備えた環境創造シアターで上映される福島の四季の映像はここでしか見られないもので大変素晴らしかった。

放射線に関する科学的な情報は充実しているが、原発事故を踏まえた施設であるならば社会的な情報をより充実させた方が学びの多い展示になるのではないかと感じた。

・ 福島大学 後藤先生のお話

福島大学で後藤忍先生による放射線副読本に関する講義を聞いた。後藤先生は文部科学省が製作している放射線副読本の内容を問題視しており、それに対抗する為に福島大学が出している副読本の政策に携わっている。

今回の講義では文部科学省の出す副読本の問題点のさらに詳しい説明を聞いたり、事前学習やコミュタン福島で抱いた放射線の疑問に答えてもらったりした。

2 日目

・ 水引アクセサリー体験

福島駅から歩いて 5 分のところに水引を使ったアクセサリー作りを体験できる工房があり、そこでピアス作りをした。工房の先生は娘が富山に嫁いだのをきっかけに水引の美しさに魅了され、水引を使った手芸を始めたそうだ。私たちは先生と一緒に水引のピアスを作りながら、地震が起こった日の話を聞いた。先生の話から、事故直後の混乱した様子や放射線に対する認識が人によって違うこと、避難生活の大変さなどが伝わってきた。

・ NPO 法人ビーンズふくしま みんなの家

「みんなの家」とは、NPO 法人ビーンズふくしまが運営する復興交流拠点・子育て支援センターだ。

今回はみんなの家の二階でビーンズふくしまの職員である中鉢さんから事業説明を聞いた後に地元の方々と一緒に夕飯をいただいた。手作りの夕飯は本当に美味しく、色んな世代の人たちがわいわいと集まって食べるので親せきの家に来ているような気分になった。子育てに不安を抱えているお母さんや居場所のない人にとって大切な場所だと感じた、こんな場が全国に多くできれば良いのではないだろうかと考えた。

3 日目

・クリスマスカレンダーづくり

親子向けクリスマスカレンダーづくりをした。こどもたちは色んなアイディアを出しながらそれぞれ可愛いクリスマスカレンダーを作り、最後はグループの中でお気に入りポイントなども上手に発表してくれた。

クリスマスを楽しみにしながら、親子で一緒に作業して一つのものを作っている姿はとても幸せそうに見えた。「ただ毎年来て一緒に楽しいことをする」という支援の意味が分かったような気がした。

4日目

・飯舘村

朝7時半に集合し貸し切りのバスに乗って飯舘村の「きこり」という施設へ向かった。

目的地に向かう途中、亘久里コーヒーズの旧店舗に立ち寄った。亘久里コーヒーズは1992年に飯舘村で開業したが、非難区域に指定されたため現在は福島市に移転して営業している。カフェの周囲にはブルーベリー畑が広がり、そのさらにむこうには広大な農地が広がっていた。村の美しい景色を見ながらゆっくりとコーヒーズを楽しめるこの場所は、以前は多くの人に愛される素敵なカフェだったのだろうと思った。

きこりでは、施設内で『「牛が消えた村」で種をまく』という絵本を輪読し、今回のゲストでありこの絵本の登場人物でもある長谷川さんにお会いした。長谷川さんは以前この村で酪農を営んでおり、現在は飯舘村の農地でそばの栽培を行っている。絵本の輪読の後、長谷川さんに村の案内をしていただいた。

飯舘村に実際に来てみて、原発事故がもたらした被害は決してデータでは表せないし、現地に行かなければ分からないことが数多くあるということを学んだ。今後も原発事故を考えるためにも多くの人に訪れてみて欲しいと思った。

終わりに

福島の前学習や現地でのフィールドワークを通して、自分が何も知らず、知ろうともしていなかったかということを思い知った。情報化社会が進んだ現代では大量の情報を手に入れることができるが、大切な情報でも自分から探しにいかないと埋もれてしまったり、現地に行かないと分からなかったりするものがたくさんあることを学んだ。福島の人々のあたたかさや、自然の美しさも、今回のプロジェクトで初めて知ることができた。

来年で東日本家族応援プロジェクトも終わりとなるが、東北には、得に福島には個人的にずっと関心を向け続けたいと考えている。

昨年の福島行きとは違っていた。「ご無沙汰しております。その後、お元気でしたでしょうか？」と心配と祈る気持ちがあった。福島での行動は昨年とほぼ同じであったが、出会った人たち、街の空気から感じたのは被災地の生活基盤の深刻な窮状であった。1年という時間が流れれば、何かしら良い変化があるのではないかと勝手に思い込んでいた。

2018 は、同行の M1 生も多く皆で事前発表に向けて何回も打ち合わせをして資料作りに熱中した。自分で調べ確認していくと福島第 1 原発の事故は「人災」であり、その被害については、未曾有なことがはっきりした。調べたすべてを発表したくて要点をコンパクトに纏めるのに苦労した。福島では初めてのフィールドワークを体験している自分に興奮していたと今ふり返っている。

2019

1 日目 <準備・みんなの家>

今年は段取りも分かっていたし、漫画展が 11 月 20 日より開催されていたため準備が無く慌たしくなかった。昨年は、全体の仕事として皆で力をあわせたという団結がチーム内に起こって良かったという印象が残っていたので今回は M1 生と馴染めないままになった気もした。

みんなの家での活動紹介：みんなの家セカンドでは新しく F-ぱぱ プロジェクトができているとのことだった。「みんなのひとしずく」、なまの声を読めて貴重な冊子だった。

続く夕食会はメニューが豊富で美味しく食事ができた。私のテーブルは院生ばかりになり M1 生とも交流できたし、みんなの家らしかった（みんなの家設立の趣旨）。参加者の中に昨年会った人と再会できたが、元気そうでほっとした。

2 日目<カレンダー作り・遊びの講習会・漫画トーク・藍原さんの話>

カレンダー作りは参加者が増えて準備は、平田さんが万端整えて下さっておりいろいろと工夫もされていた。私の担当テーブル B は子ども 5 人、母親 3 人で皆今回初参加（男児 2・女児 3）を喜び、やる気のある母親ばかりで要領よく作業を進めて美しく制作された。1 から始まる数字をランダムに配置するということは、ある種難しいようであった。一人の母親がカレンダーに手提げをつけて自宅で掛けられるようにされたが、あとの 2 組にも伝わり微笑ましかった。子どもたちはそれぞれにこだわりを持つところが違って個性が輝いていて、普段の生活にない新鮮な感覚を味合わせてもらった。村本先生から事前注意として、場・会場全体にも意識を向けるようにと言われていたが、時折忘れていたのが実情であった。何故かと考えると、人数が多い為、事故無く終わらせたいと責任を一人で感じてしまっていたようである。それは首尾よくいけば成果を自分のものにしがちであるし、上手くいかない場合は、自分を責め原因を探り他者の中に見つかったりすることにも繋がると深く実感した。一人では判らない自分の癖に気付かせてもらった。

藍原さんの話を聞く機会を作ってもらったことに感謝であった。福島の記者として故郷を取材して目の当たりにする災害の悲惨さ・深刻さを受け止める苦労が痛いほどに感じら

れた。(疲れがピークになり身体がしっかりせず夕食交流会は欠席した)。

3日目 12月8日最終日<飯舘村視察、村内宿泊施設“きこり”で レクチャー>

長谷川健一さんに飯舘村を案内してもらい、お話を聞かせてもらって本当に胸を突かれた。写真絵本「牛が消えた村で種をまく」の表紙にはかつての村の牛が映っているが今姿なく、巨大なトラクターで田を耕すのだ。それも収穫を期待するのでなくである。代々受け継ぎ耕してきた田が荒廃してしまうのを見過ごすことができないからだ。村の区長も勤め、村民の信望も厚く、農業を愛する偉丈夫の長谷川さん。「放射能は全てをバラバラにする」と言い続けて国、県、東電などに、対して声を上げ続けてきたが、壁にぶつかっているように感じた。セットになっている他2冊の写真絵本もすぐ購入した。長谷川さんも少しふれられたが、飯舘村から現状を発信（納得するかたちとして）する方法としてビジュアルの威力は大きいと思った。

もはや政治体制を変換しない限り村は存続できないとこに来ていることは確かのように思う。長谷川さんと一緒に集合写真をもらいこの日の長谷川さんからメッセージをかみしめている。

原発マネーの還流・再稼働など許してはならないと私にできる活動を今後も継続していきたいがその根底に、東北プロジェクト福島で体験したことを忘れないようにしたい。

「東日本家族応援プロジェクト in 福島」に参加して

人間科学研究科 臨床心理学領域 M2 鈴木ひかり

今回このプロジェクトに参加するまで私は福島を訪れたことがなかった。初めて訪れた福島の地で見聞きしたこと感じたことは、私にとってとても大きく、そして重いものであった。このプロジェクトの中で学び考えたことについて、証人として残しておきたい。

福島市内のこむこむで行われたクリスマスカレンダー作りでは、子どもたちやその親御さんとともに過ごすことができた。プロジェクトの参加者の中で、就学前の子どもたちも大勢おり、あの震災の後に生まれた子が大半だろうと考えると、8年という月日と時の流れを感じた。「昨年も来たんですよ」「また来年も来たいです」と声をかけてくれることもあり、こんな風につながり続けていくことが、また新たな出会いにつながるだろうと予感された。福島でのフィールドワークは、非常に衝撃的で考えさせられる時間になった。道中、たくさんのフレコンバックが目につき、飯舘村の自然とのコントラストに言葉を失ってしまった。震災から8年経ってもなお、進展しない現実があることを痛感させられた。山間部や少し道路を外れた場所などは、いまだに高い放射線量を示しており、放射線は目には見えないけれど、確かに存在するのだということを突きつけられた気がした。自然とともに生きてきた飯舘村の人々の暮らしや、震災当時の混乱、8年経っても修復できないものがあることを感じたフィールドワークであった。震災によって、まるっきり変わって

しまった状況や福島の方のふるさとへの思い、失われた日常に思いをはせると、胸にこみ上げてくるものがあった。

今回福島を訪れ、これまでの自分自身の無知や関心の薄さを痛感させられた。無関心から無理解や誤解が生まるという漫画トーク展での団先生の言葉が思い起こされた。その無関心が溝を生みその溝を埋めようとしめない事態に陥ってはいないだろうかと考えさせられた。福島の現実を、遠い地で起きている他人事としてではなく、関心を持ち続けていく必要があるのだと感じたプロジェクトとなった。復興とはなんだろうか。あの震災から8年経ったいま、変わったことと、なお変わらないことがあると知った。このプロジェクトでの学びを周囲に伝え、これからも福島に目を向け続けること、関心を寄せ続けることが、証人として私ができることだと感じている。

最後に、このプロジェクトに関わったすべての方に感謝いたします。多くの学びと出会いを得ることができました。本当にありがとうございました。

東日本・家族応援プロジェクト 2019に参加して

対人援助学領域 M2 工藤 芳幸

1. はじめに：2度目の福島へ

終業後に急いで職場の最寄り駅へ。2度目の福島プロジェクト参加は深夜に福島到着というプランとなった。東京で東北新幹線に乗り換えると、途端に空気が変わった。東北につながる場所に来たことを肌で感じた。東北新幹線の車両空間がそう感じさせるのか、乗客の雰囲気なのか、「次は上野」というアナウンスなのか。そのいずれもだろう。フリーペーパーの「トランヴェール」に南相馬市の食堂の記事があった。ある作家が「旅をすることも復興支援」と書いて、取材した記事だった。これから福島に行くということだけでも復興支援になるのだろうか。大阪で暮らすようになってから8年。震災後の年数と概ね同じ。東北新幹線で東京から移動することはほぼなくなった。「トランヴェール」は鞆に入れてもらっていくことにした。

23時21分。福島駅に到着したときはすっかり夜中になっていた。

2. 福島の親子とクリスマスカレンダー作りを楽しむ

福島駅前のこむこむで昨年と同じく準備。なんと今年は70名超えの参加者だという（定員30名）。今年同じテーブルに着いたのは2つの家族。どちらも3歳の子どもと小学生の子どもが1人ずつの3人。4回目の参加というベテランの親子はさすがに手際が良く、それぞれの構想に沿ってクリスマスカレンダーづくりを楽しんでいた。

もう1家族は初参加である。周囲の進行に私以上に気を配っていた。ハサミが1本しかなかったもう1家族の様子も良くみていて、どうぞと貸してあげていた。あちらこちらに

注意が向く 3 歳の子を上手に声かけしてやれることをやってもらっていた。ハサミはまだ上手に使えないが、切るのが好きという。小学生の男の子はシール貼りに夢中であった。「カレンダーを貼る場所が難しいですねえ、冷蔵庫とかに貼れるかな？」と声をかけると、「いつものカレンダーを外して貼るかなあ」と子どもと会話をする様子があった。見せ合いの時間に私が「工夫したところ」と言ったことを「好きなところ」と子どもたちにわかりやすく言い換えていた。丁寧な関わりをされる方だと思った。ベテラン小学生の女の子はかなり丁寧に、ゆっくりとおやつを貼る順番を考えていた。最後に見せ合いをして、工夫したところを話す段階になると、横を向いて話そうとせず。マスキングテープがいいね、というところと振り返ってうなずいた。今年出会った家族はこんな感じだった。

昨年から 2 回経験して、こうしたイベントを企画する意味、その可能性を更に感じている。早速大阪での自分の仕事の中でクリスマスカレンダー作りをしてみようと計画をしているところである。

3. フリージャーナリストの藍原寛子さんのお話

元・福島民友記者で、現在はフリージャーナリストとして原発問題取材し発信しておられるという。福島第 1 原発の事故は突然起こったわけではなく、原発の小さな事故は藍原さんが福島民友に入社した頃、1990 年には普通にあったという。福島第 1 原発の取材があった際、新聞社には原発事故の際の取材・報道のマニュアルはなかったのだそうだ。当時、共同通信社と読売新聞社ではマニュアルを作成していたが、その内容は大きく異なる部分があり、共同通信は「なるべく遠くから」、読売新聞社は「できるだけ近く」の場所で取材を行うように、というものだった。放射線事故にどのような対応を取るべきか、はっきりとした答えがないのはその頃からだったようだ。1999 年の JCO 事故の際には茨城県東海村の方が福島県いわき市まで避難してきたこともあったという。福島第 1 原発事故の前触れになるような、原子力災害のインシデントに対してどこまでの対応をしてきたのだろうかと思うとともに、原子力を扱えるのだろうか、という思いもよぎった。

ガイガーカウンターを作るプロジェクトをしている地元の中小企業もあるという。放射能は目に見えないだけに、「放射能がある」ということを知ることが武器になるのだ。藍原さんの自宅にもまた汚染土がある。震災から 2 年半たってようやく除染ができたが、汚染度は庭にある。平場に置くか、庭に埋めるか、どちらかの選択になっただろう。藍原さんは平場で置きたかった（そこにあることがわかるように）そうだが、両親は見えていたくないということで、埋める選択をされたそうだ。親族間でも放射線への態度は異なるのだ。こうした原発が福島にあるということ、そして災害が起こったときに住民に対して提示される選択肢が少ないこと。なぜ、東北なのだろうか。

5. 飯舘村再訪：長谷川健一さんのお話

最終日は福島地球市民発信所の竹内俊之さん、藤岡恵美子さん（以下、福伝さん）のガイ

ドで飯舘村のフィールドワーク。昨年度は伊藤さんのお話で衝撃を受けた「きこり」でのワークショップ。今年は元酪農家でそば農家である長谷川さんのお話を伺い、村内をバスで廻った。長谷川さんのご自宅兼そば粉工場も見学させていただいた。「原発事故は全てのものをバラバラにする」ということばが印象的であった。

震災当時、長谷川さんは直感的に長男夫婦を飯舘村から県外避難させた。次男は牛の世話のために残ってもらったそうだ。その際に長男には飯舘村で酪農は続けられないかも知れないと話したという。乳牛からは毎日搾乳をする必要がある。JOC 事故の時に最初に放射性物質が検出されたのが牛乳とほうれん草であった、という経験から、飯舘村では酪農はダメになると思ったそうだ。

そば栽培を続けている意味は、土地を荒らさないためなのだそうです。そば粉工場には、1億以上の設備費がかかっており、それは国から補助金によって賄われているそうです。しかし、減価償却を行い、利益率を上げることは難しいという。東北を本当に復興させるための青写真が誰が描けるのだろうか。

6. 飯舘村を歩いて

道の駅で買い食いもした。私は道の駅のような店舗が好きだ。農機具な DIY の店であるコメリは完全に廃墟であった。それでもなんとなく暮らせるような町に見えた。故郷の町に近い風景。車で少し走れば大きな町にも出られる。違いはやはり放射性廃棄物である。

長谷川さんの話を聞きながら、当時の緊迫感を思い出した。福島第 1 原発が水蒸気爆発を起こしたとき、もう東北には住めなくなるといった。故郷の宮城はすぐ隣である。テレビにかじりついて放射線がどこまで拡散するのかと経過を見守った。震災後、親戚はガイガーカウンターを購入したという。当時はまだ祖母が家庭用に耕していた畑も測定してくれたのだという。

今はすっかり静かになった。一見すると震災があった町なのかどうかもわからない。大阪北部地震で全半壊した周囲の家が最近になってようやく解体され、更地が増えた。震災直後の姿である。福島の内陸部ではその被害は目に見えて残っていない。震災から復興したのかと言われるとやはりそうではない。数多くの汚染土が積まれているのだ。また今後も福島から宮城、岩手を車で、電車で、ゆっくりとめぐってみたい。

6. 終わりに

今回、震災から 8 年余りが経過したそれぞれの場所で、「私はこうしていこう」と心を決めて歩いている人たちがいることを知った。中にはまだまだ決められない人たちもいるのであろう。いったんは決めても、その状態でまた迷っているということもあるかも知れない。そうした細かな心の動きまで知ることにはかなわなかったが、想像できる範囲は広がったと思う。東北に生まれて大阪に暮らしている者として、この体験を話していこうと思っている。

最後になりましたが、お世話になった皆様に厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

東日本・家族応援プロジェクト(福島)を終えて

人間科学研究科 対人援助学領域 M2 田中凜太郎

私は去年も参加し二度目の福島となった。やはり東北の地はとても寒く同期から「そのカッコ寒くない？」といったツッコミを受けるほどであった。去年も参加していたおかげで今年のプロジェットの動きについては多少予測がついた状態で動くことができ、クリスマスカレンダー作りも余裕の心を持って子供と接することができ、子供から「ありがとう」と言われたことで心がまた温まったことを感じた。しかしその中でも今年は今年で去年とはまた違った感覚を味わった。

福島県に行く数日前、私の中では正直一年経ったことで去年感じた印象の鮮明さは消えていった状態であった。東日本大震災後の話もこのような形で人々の頭から少しずつ風化していったのではないかと思った。実際にフリージャーナリストの方から原発関連のお話を聞いた際に、原発について思い出す機会がなくなっているといった発言を受けてこの考えはより強くなっていた。それに合わせて酪農家の長谷川さんのお話では、住民の声(政策に対しての批判)が反映されなくなっているという本音を聞いた。

私はこのプロジェクトが終わった今でもこれらのことがどうしても頭に引っかかっていた。大阪に帰ってから自身の研究(いじめ問題)について考えた時に、被害者の SOS の効力が次第になくなってしまっているのではないかと思うようになっていた。いじめ問題でもいじめを受けた者が SOS を出しているのにそれを見過ごしてしまい、結果ニュースになるほどの重大な事件に発展するといったケースはよくある。ここで今回のプロジェクトを通して私が思っていたのは、SOS を出している人に対して次第に薄れてしまっている現状がそこにはあり、そういった現実を助けて求めている人を強制的に絶望に押し入っているのではないかということである。

今回のプロジェクトを通して被害を受けた人の心の叫びそのものについて考えられるようになったことは私にとっての収穫である。ただ、私がこのように考えられたのはしっかり現地に行き、直接そう言う話を聞いたからであるとも言える。実際に飯舘村に足を運んだ時に、「そうだ、ここでは放射線の問題はまだ残っているんだ」と言うように、反芻する思いをした。本プロジェクトの意義でもあるように継続的に支援していくことの大切さを改めて実感すると同時に、直接足を運び直接見聞きすること、そしてそこで起きている現

実をしっかり発信することが大事であると改めて思い知らされた。この三日間で私自身の研究に対する考え方、そして福島原発問題で起きている実態についての考えが身につき、そして今度はそれをしっかり社会に還元していこうと考えている。

最後に指導教員の方々をはじめ本プロジェクトに関わった皆様に心より感謝を申し上げる形で締めさせていただく。

「東日本家族応援プロジェクト 2019 in 福島」に参加して

人間科学研究科 臨床心理学領域 M2 植木雪音

今年のプロジェクトに参加することを決めてから、実際に現地を訪れるまでの間、昨年以上に自分には何ができるのだろうと考えがまとまらなかった。私は、昨年もプロジェクトに参加し、多くの学びを得た。昨年に引き続いて今年も参加すること決めたのには理由がある。昨年、以前から親しみのあった福島県に震災後初めて訪れて、震災がもたらした被害、原発事故による放射線被害のことなど、それまで限られたメディアの情報でしか知らなかった福島について新たに学んだことが多くあった。震災から7年が経過して進んだこと、変わっていないことを知り、復興とは何か考えさせられる経験であった。あれから1年が経ち、昨年あれほどに衝撃を受けたはずなのに、関西で過ごしていると自然と福島のことを考える機会が少なくなっている自分に気が付いた。そのため、プロジェクトに関わった「証人」としての自覚と責任をもう一度再認識することが必要だと考え、今年のプロジェクトへの参加を決めた。

先に述べたように、私にとって東北は以前から親しみのある地域であった。私の地元である北海道に最も近い地方であり、震災が発生する前の年には中学校の修学旅行で東北を訪れていた。その中でも福島県は伯母家族が住んでおり、特に親しみを感じていた。今回のプロジェクトでは、昨年とはまた違う視点で多くの学びを得られた。ここには、特に印象に残った学びを記しておきたい。

プロジェクト2日目のクリスマスカレンダー作り。多くの親子と交流することができ、地元暮らし人たちの方言の訛りや雰囲気は温かくてスタッフの私たちも楽しく過ごすことができた。昨年よりも参加人数が多く、震災後の支援というよりも年に一度のイベントという形で定着しているようで、プロジェクトを継続することでの良い変化を感じることができた。一方で、最終日の飯舘村の訪問は、震災から8年という時間がどれほど、長くて、短いものか、考えさせられる経験だった。

昨年と同様、最終日は福島の竹内さん、藤岡さんに案内していただきながら、福島市から飯舘村に向かった。飯舘村では、村民の長谷川さんから震災当時の様子、村全体が放射線の被害を受けながらも、帰還する決意をしたこと、長谷川さんの当時の気持ちなどを含めながらお話いただいた。長谷川さんのお話の中で、最も印象に残っているのは、原発事故は「す

べてのものをバラバラにする。それは修復できない。」という言葉だ。原発によって、それまでの日常を壊された長谷川さんの口から出たその言葉は想像を絶する重みがあった。目に見えない放射線の恐ろしさ。線量計がなければ、感じることもない放射線。飯舘村に向かう車中から見える大量のフレコンバック。昨年と違うのは、道路から見えないように白い柵がしてあること。来年開催される東京オリンピックのためだという。見えなければいいのだろうか。この地で暮らしている人の気持ちがかき消されているような気がして、悔しい思いがこみ上げた。

大阪に戻ってきて、福島で得られた学びをこのレポートで整理していると、まとまりきらないほどの学びを得られたと実感した。このプロジェクトに参加した自覚と責任を持ち続けることが私自身の課題であると感じた。私は来年度から教職に就く予定である。震災や原発の記憶がほとんどなかったり、今後は震災後に生まれた子どもたちも多くなる。そんな子どもたちに自分が証人として何ができるのか。どう伝えていけるのか。「伝える」と「伝える」ことが別物であることを心に留めながら、子どもたちが福島のこと、東北のこと、震災のこと、原発のことを考えるきっかけを作りたいと強く思った。私は、震災当時の福島のことを知らない。それは、今後変わることもない事実である。しかし、だからこそ、当事者ではないからこそ、感じることを強みに、このプロジェクトで感じた気持ちを忘れないように福島のことを考え続けたい。

「東日本家族応援プロジェクト 2019 in 福島」に参加して

人間科学研究科 臨床心理学領域 M2 上仲 晴菜

昨年もこのプロジェクトで福島に行かせて頂き、今年は2年目の参加である。福島県のこと、原発問題のことなど、様々なことを昨年のプロジェクトで考えさせられ、とても貴重な体験をさせていただいたにもかかわらず、だんだんと福島に対する意識が薄くなってきた事に罪恶感を感じ、今年も福島のプロジェクトに参加させて頂いた。

フィールドワークのために12月5日(木)から行き、12月8日(日)までの福島で学んだことで特に印象に残ったこと、感じた事を報告したいと思う。

12月5日は、フィールドワークに特定廃棄物埋立情報館リプルンふくしま、東京電力廃炉資料館に行った。その後、夜に福島大学の後藤先生の講義を受けた。実際に施設に行ったときに感じた事と後藤先生のお話は、全く異なった視点であった。様々な視点を知ること、また疑問を持つことの必要性について感じた。

12月6日は、午前中に、フィールドワークでコミュタンに福島に行った後、亜久里コーヒーに行った。午後からは、次の日のイベントであるクリスマスカレンダーの準備を行った後、ジャーナリストの藍原さんのお話を伺った。夜にはNPO法人ビーンズ福島さんが運営されている事業の1つである「みんなの家」に訪問させていただき、ビーンズ福島さ

んがされている取り組みや福島の実状についてお話を伺った。ジャーナリストの藍原さん、ビーンズ福島さんのお話では、震災前のこと、震災後から現在のことについて伺うことができ、とても貴重な経験であった。原発事故の問題はまだ解決できていないことがたくさん残っているが、福島県民の方の中でも風化してきており、忘れてしまいたいことであるという現状について知ることができた。

12月7日は、クリスマスカレンダー作りのイベント、遊びの講習会、団士郎先生の漫画トークが行われた。クリスマスカレンダー作りを通して多くの子ども達、保護者の方々と交流することができた。どの子どもも楽しそうに作っている様子を見て、嬉しくなった。団士郎先生の漫画トークの中であった「孤独ではなく、見守られていると思うことで支えられる」言葉が印象に残っている。プロジェクトを通じて、「見守っていること」を福島の方に伝わったらなと感じた。遊びの講習会では、子どもがルールを考え自由に遊ぶことを尊重することの大切さに気がつき、今までの自分の子どもとの関わりを考え直す機会となった。

12月7日にはフィールドワークは、飯舘村に向かい、ふくしま地球市民発電所の方、飯舘村の村民である長谷川さんのお話を伺った。震災前から長く飯舘村に住まれている方のお話を聞き、原発事故がどのように村民の方の人生に影響を与えたのか、またなぜ村に戻りたいと考えられたのかを知ることができとても貴重な経験となった。今回、福島に行かせて頂き、改めて原発の被害を受けた福島の問題は現在も続いていることを感じた。また、2年連続で福島に行かせてもらい、様々な方のお話を聞かせていただき、何を選ぶのが正しいのか決めるのは難しく、原発問題について簡単には答えを出すことができないと感じました。改めて、原発問題にはシャープな答えがなく、飯舘村の方がなにを選択しても責めることはできないと感じた。様々な方の視点になって考えることの大切さを学ぶことができた。

震災から時間がたった今だからこそ出てきた課題も多くあり、福島の問題だけでなく、みんなの問題だと考え、今の福島の状況について関心を持ち、考え続けたい。

最後になりますが、お世話になった皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

「東日本・家族応援プロジェクト 2019 in 福島」に参加して

人間科学研究科 臨床心理学領域 M2 小見山 文

震災当時私は高校1年生だった。学校単位での募金などはあったように記憶しているが、私は現地に行くこともできず、もどかしい思いを感じたことを覚えている。

今回私にとって初めての東北、初めての福島であったが、大変多くのことを学び、考えることができた。その一部ではあるが、印象に残ったことについて報告したい。

まず、0日目として、特定廃棄物埋立情報館リブルンふくしま、東京電力廃炉資料館を見

学した。プロジェクト参加前に福島のことを調べる中で、廃炉は完了しておらず、まだ被害は続いているはずなのに、原発の話題があまり語られなくなっていることがわかった。それを見て私は、いくら放射線は感じることはできないと言っても、実際に被害に遭っている人たちはいるのになぜだろうと思っていた。しかし、フィールドワークの車での移動の際に、道の脇に積み重ねられたフレコンバックや、帰宅困難区域の立て看板を見て、こんなに近くにあるのに体感としては何も感じられず、放射線を意識し続けることの難しさを知った。

1日目は、朝にコミュタン福島を見学した後、みんなと合流し、こむこむでクリスマスカレンダー作りの準備を行った。その後、ビーンズふくしまのみんなの家でみんな de 食堂に参加した。子どもたちと一緒にたこ焼き器で作ったシュウマイはとてもおいしかった。品数もとても多くて、ひとり暮らしのは私にはなかなかない機会だった。

2日目はクリスマスカレンダー作りを行った。私のグループには去年も来たという女の子がいて、去年のプロジェクトとのつながりを感じた。

3日目は、福伝の竹内さん、藤岡さんの案内で飯舘村内を見学した。その後、「きこり」にて、村民の長谷川さんから震災当時に考えていたことや村の様子について、貴重なお話を聞くことができた。村内を見学する中で、1歩違うだけで放射線量計の数値が違うことに驚き、除染作業の難しさを知った。長谷川さんの話では、「までい」な村の村民の方の絆を知り、強い絆で結ばれた方々が避難によって離れることのつらさを感じた。

4日間の福島で様々なことを学び、原発について、震災の被害について考えることができた。私は、今回9年目の福島を見た「証人」として今後も福島のことを考え続け、どう変化していくかに敏感でありたいと思う。

最後に、今回プロジェクトに携わってくださった方々、たくさんのお話を聴かせてくださった方々、現地で出会えた方々に深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

2019 福島レポート

博士後期課程 張亦瑾

今回、二度目となる「東日本家族・応援」への参加を経て、災害・復興に関することを再度振り返る機会となった。私自身、福島への訪問は四度目となり、人々が災害により体験したことや復興において必要とされるものが大変複雑であるという印象を得た。一方、昨年と比較し、今年のイベントやフィールドワークはより充実したものとなった。

現地でお世話になっている NPO 法人ビーンズふくしま、ふくしま地球市民発信所、後藤忍先生、市澤美由紀様、小磯厚子先生をはじめ皆さまの元気なお姿を拝見することが出来、嬉しく感じた。しかし、話を聞く限りでは、原発の問題により福島の復興が遅れていることが分かった。「クリスマスツリーカレンダー作り」、「おもちゃ講座」、「漫画トーク」や現地の人と食事しながら話すことを通して、放射線の心配やそれにより不便が生じているなど

ということは、あまり話されなかったが、避難指示解除の区域へ戻るか否か、また、若者や医療体制が依然不足している状況であるとのことだった。飯舘村民の長谷川健一様によると、「原発は一切を壊れてしまい、何もかもばらばらにした」のことだったが、私はそれに対して、原発問題が解決しない限り、福島に住む人々の生活は落ち着かないだろうと考える。

対人援助者にとって、科学の知識と統計の数値より、私は人々の体験が更に強い印象として残った。廃炉資料館に展示された原発事故当時の映像により、発電所の従業員が体験した怖さを感じ取れる。私は、よく知られている「福島 50」ではなく、応急処置に参加していた 69 人を尊敬した。また、写真絵本「牛が消えた村で種をまく」は、酪農が体験した苦しみを永遠に忘れないものとした。政治家にとって、牛などの動物が犠牲になることは被害状況における数値のひとつにすぎないが、酪農家にとっては、家族を殺されるのも同然の辛さであると分かった。

行政組織における「復興」とは明るいイメージで、「土地への愛着」などと言えば良く聞こえるが、酪農家などは実際、何度も辛い経験を繰り返し、絶望感や罪悪感を背負っている。そして、生活の再建は並々ならぬ努力が必要であり、簡単なことではない。

現状を知れば知るほど、自分が対人救助者としてもっと人々に寄り添い、理解した上で応援していくことが大事であるということがわかった。今後もこの活動を続けていく共に、より現地へ関心を持ち活動の幅を開けていきたいと思う。

「東日本・家族応援プロジェクト in 福島 2019」に参加して

博士後期課程 河野暁子

今年の福島プロジェクトは、沿岸にあるいくつかの資料館を巡るフィールドワークから開始した。東京電力廃炉資料館の「反省と教訓」の展示では映像と音声異なり、「安全を創造する（原子力事業者となる）ことを決意します」と、映像にはない（原子力事業者になる）という言葉が音声には入っていた。環境省が設立した特定廃棄物埋立資料館リプルンふくしまは、除染作業の工程が楽しく学べる施設で、昨年訪れたコミュタン福島とよく似ていた。さらに、中間貯蔵工事情報センター、双葉思い出の品展示場を回り、福島大学で後藤忍先生の講義を受けた。この日のフィールドワークを通じて強く感じたのは、「原発事故はあったが、事態は収束に向かっている。放射線も心配ない」ということを前提に、物事が進められていることであつた。

翌日は、飯舘村から避難され福島市内で営業されている極久里コーヒーを訪ねた。ケーキもコーヒーもとてもおいしく、店内はクリスマスを待つ暖かな雰囲気に包まれていた。

夕方はビーンズ福島を訪れ、子育て支援等のお話をうかがい、夕食を一緒にいただいた。大勢で準備をして食べる夕食はおいしく、普段の活動もこんなふうに行われているのだと感じた。

プロジェクトのメインであるクリスマスカレンダー作りでは、大勢の親子が参加してくださり、楽しそうにカレンダーを作っていた。おもちゃ講習会では、素朴なおもちゃで子どもも大人も楽しめることを学んだ。団先生の漫画トークは参加者も多く、みなさん熱心に聞き入っていたのが印象的だった。フリージャーナリストの藍原寛子からは、除染や保養についてお話をうかがえた。福島での現状を知れば知るほど、目をそらしてはいけない思いがわいてくる。

最終日は、ふくでんさんの案内で飯舘村のフィールドワークであった。原発事故前は酪農をやられていた長谷川健一さんのお話もうかがった。飯舘村はとても美しく、そこに積まれたフレコンバッグの山を見るのはつらかった。ここで暮らしている方々、ここから離れざるを得なかった方々がいることを、きちんと感じ取らないといけないと思った。長谷川さんが「放射能災害はすべてをばらばらにし、修復が不可能だ」とおっしゃったことが、忘れられない。初日のフィールドワークで感じた「原発事故の収束」を進めている大きな流れには、この事故で生活が一変してしまった方々の思いが、まるで伝わっていないと感じた。

限られた時間の中で、とても多くのことを学ばせていただいた。今後は、福島プロジェクトで学んだことを考え続け、福島で起きていることを福島だけの問題とはせずに行動していきたい。

最後に、今回の福島プロジェクトでお世話になりましたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

福島プロジェクトに参加を重ねて

対人援助学領域修了生 NPO 法人家族・子育てを応援する会代表 新谷真貴子

6回目の福島の震災プロジェクト。今年も、子どもたちのクリスマスカレンダー作りや遊びコーナーの楽しいプログラムで、親子の笑顔が一杯見られ、団先生の漫画トークでは、お隣の方とのたった数分の会話で、「木陰の物語」が、この被災地でまた物語を生み出しているというお話を伺うことができました。「みんなの家」では、今年も美味しい食事を用意して待っていただきました。ビーンズふくしまの中鉢さんは多面的な支援を展開されていて、毎年支援の視点を学ぶことができます。それぞれの人々にある震災後の生活の中で、コミュニティが新しくなったり、家族が分離していたり、人がそれまでとは違った生活を送らざるを得ない厳しい現実もあります。

昨年、福島の震災プロジェクトのレポートで、このように書いています。「被災者の立場に立って、子どもたちの未来を危惧して、地道に継続して活動しておられる、後藤忍さん、伊藤延由さん、小淵真理さん、中鉢博之さん、竹内俊之さん、藤岡恵美子さんから、福島県の現状と復興支援の課題に向かって活動されていることについて、丁寧に聞き取り

をさせていただきました。怒りや虚しさといった気持ちが伝わってきます。それでも、課題に向かう支援活動の中に、人の粘り強さや正義感を感じました」と。

今年も、ふくしま地球市民発信所（「福伝」）の竹内さん・藤岡さんが飯館村を案内し、私たちが少しでもいい学びにつながるように、場とレクチャーを設定してくださいました。

飯館村の活気のある以前の村の映像を見た後、飯館村で生まれ育ち、今は帰還しておられる長谷川健一さんから、原発事故が起こった時の状況をリアルに伺い、あんなに美しく、人が笑い合っていた活気のある村が奪われた、その現実の悲惨さを感じました。長谷川さんが何度も言い切っておられた、「放射能災害はすべてのものを奪う」「再興はできない」「あの飯館村はもう戻らない」ということ。放射能汚染から村民を少しでも守れたはずの状況があったのに、実際にはその方向に向かわなかったというお話は、衝撃的でした。

原発事故から、長谷川さんは、人の為に純粹に行動されました。その一方で、事実を伝えずに住民をとんでもない量の外部被曝の方向に向かわせてしまった、行政のあり方が「人災」を感じさせるものでした。村民の放射線への警戒心をゆるめ、ムダに被曝量をふやした大学の研究者、一方、村内の汚染状況を調査し、いち早く避難を村長に提案した研究者がいたこと。それでも、その研究者の助言と報告が村民に伝わらなかったこと。悔しくても、その時に戻ることはできません。

理不尽さ、腹立たしさ、虚しさの中でも、「やっぱりやらないとだめ」と、今できることをやり続けておられる長谷川さん。

原発事故後の村と村民の姿を写真とビデオで記録し続け、映画や著書、講演会で飯館村の事実・原発事故の理不尽さを発信されています。訴訟団長としても訴えて、生活を支え家族同様の牛たちを最後まで守るために奔走し、多くの牛を助けました。しかし、自分たちの大事な牛やイノシシを泣きながら屠畜する選択をせざるを得なかったこと、さらに、酪農仲間が自殺するという辛い目にも遭ってられました。

長谷川さんは、今、飯館村が荒れ地になるのが忍びないと、大きなトラクターで広大な土地を耕しておられます。補助金が出るとはいえ、途方もない作業です。私の家も農業をしていますので、理屈抜きに、先祖から何世代も引き継いだ土地に対する愛着を持っています。食べる分だけなら買った方が安くて、体も楽だとはわかっているけど、冬に土を耕し、春に苗を育て、田植えをして、夏には害虫から守り、緑が濃く大きくなっていく様子を見守り、一年間の様々な工程を経て、ようやく稲に米が実ります。最後に稲を刈り取って、新米を口にするときには家族皆で喜び合います。我が家では、感謝を込めて、刈り取った米の一束は一年間仏壇に供えてあります。そのようなことが何世代も続いた、その何

百人という人の「土」への積み重なった思いが断ち切られたらどんなに辛いことだろうと思います。

毎年行くたびに、福島の実況のいたたまれない痛みを感じて帰ります。それでも、「今、自分のできることをやらない」と思い動いておられる人々。そこに、計り知れない「人のたくましさ」を感じます。どんなことがあっても明日の希望につながる何かを見つけるために、自分たちの置かれた現実と向き合っておられる姿に、私は、簡単に人間は屈するものではないという、人としての「希望」をいただきます。

2011年震災が起こった時には、私は中学校の教壇に立っていました。そして、中学生にどのようにこの現実を伝えていくのかを模索していました。人としてこの現実から学ぶことがあると思っていましたが、福島のことをどう伝えたらいいのか、ずっと分からずにいました。そんな時に偶然出会った福島で被災された方からお話を伺い、中学生と共に考えることになりました。その方が仰った、「放射能が怖い」「忘れないでほしい」という言葉は今もずっと心であって、今回、長谷川さんの著書『までいな村、飯館』にも、「飯館村で起きたこと、続いていることをどうか忘れずに」という言葉があって、私は改めて自分なりに考え続けて、出来ることをしようと思っています。

震災が起こって、年の経過とともに変化すること、ずっと変わらないこと、それを「証人」として見ていくこと、その中に、自分の使命や役割・生き方を考えます。震災プロジェクトに参加することで、現実の厳しさやどうしようもない辛さを突き付けられますが、思いがけない発見があり、人の力のすごさを毎年感じさせていただいています。